



ケニアにて子供たちとともに

ケニアの赤ちゃんを救うため

佐野 友妃子 主事（京都第一赤十字病院）

●平成25年11月から平成27年1月まで派遣

私は京都第一赤十字病院（以後、第一日赤）の一員でもあり、海外派遣要員でもあります。海外派遣では事業が円滑にすすむように、現地のスタッフや住民と協議を行い、実施にかかる調整や進捗状況の管理を行います。

初めての海外派遣は、2010年にハイチを襲ったマグニチュード7.0 死者約23万人の大災害。第一日赤の仲間が「こっちは私たちに任せて、むこうで私たちの分も頑張ってください！」と声をかけてくれたことが、すごくエネルギーになりました。

そして今度は、一年間ケニアに行くことに。世界でも最悪のレベルにあるといわれる、ガルバチャーラ県の乳幼児の死亡率（出生1,000人あたり75人、日本では1,000人あたり4人）などの改善のため、ケニア赤十字社をサポートすることが目的です。



出産時の大量出血でお母さんが亡くなった女の子



（中央）ハリマさん（右から2番目）カラくん

タナ村に住むカラ君は、ハリマさんの6人目の子ども。30km離れた病院に行く道の途中で産気づき、その場で生まれました。

どうにか出産したものの、そのままカラ君を連れて、歩いて病院に向かったというから驚きです。この地域では、病院までの距離が遠いため、自宅を出産する女性が、命を落とすケースが少なくありません。

私たちは、巡回診療を行うとともに、安全な出産についての啓発を行いました。少しずつではありますが、病院での出産も増え始めています。

日本の皆さんに伝えたい思い

私たちの取り組みの主役は現地の人達です。村人のなかから選ばれたボランティアが公衆衛生や保健の研修を受け、村人に伝えていきます。

ビリキ村の人々は、「保健の知識を持たなかった私たちがそれらを学び、命を失う子どもが減りました。日本のみなさんのご支援が、村人を守ってくれている」と感謝の言葉を話してくれました。



笑顔の素敵でビリキ村の人々



負傷者の治療にあたる的場医師

ネパール～地震災害、命を救うために

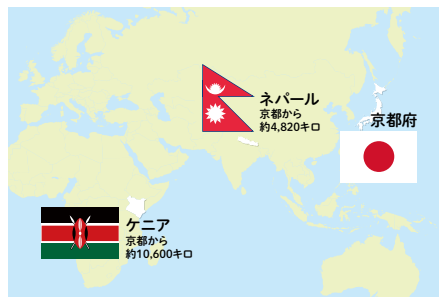
的場 裕恵 医師（京都第一赤十字病院）

●平成27年6月2日から7月15日まで派遣

ネパールの首都カトマンズから北西80km付近を震源とするマグニチュード7.8の地震が4月25日に発生し、死者はネパールでは7,600人を超え、周辺国のインドや中国でも死者がでました。

日本赤十字社は直ちに保健医療チームを現地へ派遣し、7月31日までに1万5,599人の患者を診療し、こころのケアは3,536人、巡回診療では1,183人を診療しました。

私は、保健医療チーム第2班の医師として、メラムチ村での医療活動とともに、山間部での巡回診療を行い、けが人や急病人の手当てにあたりました。



ケニア赤十字社のスタッフと一緒に

ケニア～安全な出産が増えてきました!

近藤 松子 看護師（京都第一赤十字病院）

●平成27年1月から9月26日まで派遣

私は、ケニア赤十字社で、現地の人びとが自分の力で事業を進められるよう支援をしています。

また、日本赤十字社からの資金が効率的に使用されているかの確認も行っています。この地では、私たちには当たり前のことが、住民にとっては貴重な情報となります。最近では病院での安全な出産が増えてきています。これからも現地の人達の力になれるよう、任務を全うしたいと思っています。

この体験を多くの人に伝えたい

小谷 奈緒 さん（華頂女子高等学校 3年）

●平成26年8月20日から26日まで派遣

私にとって、青少年赤十字（以後、JRC）の国際交流（マレーシア・シンガポール）に参加した高校2年生の夏は、忘れられない思い出です。マレーシアでのホームステイ先はマリアンさんという19歳の女性で、毎日、女子トークで盛り上がりました。マリアンさんとは今もSNSなどを通じて交流をつづけています。シンガポールでは、公立中学校の訪問。学園祭と重なっていて、私たちも一緒に楽しみました。

最後の夜は、サプライズで私の誕生日ケーキをシンガポールのJRCメンバーが用意して、祝ってくれました!

言葉の壁や文化・宗教の違いなど、大変なところもありましたが、それを苦勞しつつも乗り越えられて、とても意味のある国際交流になったと思います。言葉は「英語」がほとんどでしたが、ホームステイなどをしているうち、言葉の壁を越えて心と心が通じる貴重な体験をしました。これからは、赤十字の活動や国際理解を深めてもらえるように、この体験をたくさんの人へ伝えていきたいと思っています。



マリアンさん（右）のお友達と一緒に